慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東畑精一・ 高橋泰蔵監修 金融経済研究所編 明治前期の銀行制度：日本金融市場発達史I
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.216(106)- 217(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0106
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最後に、結章都市発展の要因とその構造が、編者の山鹿博士によって書かれているが、これは前章に展開されたいくつかの理論、実証を総合する、いわばシンセシスにあたるものであると考えてよい。

以上、本書の内容について紹介したが、一口に言って、本書は小冊子であり乍らかなりよくまとまっており、その限りで有意味な作業といえることを強調したい。しかし乍ら、誰にも容易に指摘できることは、本書の前半、即ち理論の部と後半実証の部との不連続性であろう。成程、第二章に示されるエコノミックベイス、第三章に示される種々な都市構造の模式は、実証の部でもしばしば引用され、実証の下敷きになっているが、かんじんのアロンゾの理論や所得決定の理論は後半では全く触れられず、この点の不連続をどう解釈したらよいか、多くの読者を途惑わせるものがある。いうまでもなく、これは理論畑の研究者は実証に弱く、フィールドワークに従事している者は必ずしも理論に強くないという周知の事実にもとづくものであるが、それと同時に協同研究というもの自体にわれわれがなじんでいない結果でもあろう。本来協同研究は、ことなった知識体系、研究方法をもった者が集まって相互に意見を交換し、そこに独自の研究成果をさがし求めるという研究過程であって、その結果はいくつかの異質的な内容の並列であるべきではなく、むしろ有機的一体となるものであろう。この点、この研究グループは年齢も若く、その統率者として山鹿博士という学識人格ともに信頼できる存在をもっているのがなによりも強みであり、今後よりよき成果を期待できるものと確信している。（明玄書房・昭和四十年十月刊・A5・一四二頁・六五〇円）

—高橋潤二郎—

＊　＊　＊

東畑精一
高橋泰蔵監修
金融経済研究所編

『明治前期の銀行制度
—日本金融市場発達史I—』

本書は、数年来金融経済研究所がおこなってきた、日本金融史にかんする共同研究の成果の一つであり、明治初年から二〇年代ぐらいの時期までが扱われている。この共同研究は、今日のわが国金融市場の特殊性よりする固有の問題点の解明をめざして、それを歴史的にあとづけようという展望のもとにおこなわれており、その成果が当初より期待されていたものである。わが国の金融史（日本資本主義の発展と金融構造）研究は、すでに永い歴史をもち、戦前は幕末期から維新期の幣制を中心とした研究がさかんであった。しかし、金融を一つの構造として把握し、その歴史的展開を、日本資本主義の歴史的推移にてらして解明しようとする意図は、戦後のことに属しており、未開拓な分野であるということができる。近年金融史研究がとみにさかんになった理由の一つは、戦後の日本資本主義の発展のうちにおける金融の特異な構造（過度の間接金融偏重）の由因を明らかにしようという意図からであろうし、また、いますこし広範な問題意識としては、資本主義（とりわけ国家独占資本主義）における金融関係の役割の評価というような点にも帰することができよう。したがって、その研究方向も多様であった。本書の筆者の一人、渡辺佐平氏によれば、その方向は三つに区分されている。その一つは、農業経済（＝地主制）関係からみた金融把握、第二に、経済史的に日本資本主義の特殊性にかかわらしめるもの、第三に、金融経済学的把握。

本書は、その共同研究的性格からして、これら三つの立場の綜合のうえになりたっているといえよう。むろん、統一的な叙述ではなく、二つの論文から構成されているにしろ、それぞれが、綜合的視野に自らの研究を位置づけようとされている。まず、第一編の明治前期の国立銀行（杉山和雄氏）においては、国立銀行にかんする資・史料の発掘の進展にともない、国立銀行を類型的・抽象的に把握することをさけ、資料による実証的究明を志向されている。とくに、第一章、銀行局年報の分析は、統計的、計数的な分析から、国立銀行の資産構成、手形取扱状況をみ、地域的な金融の集中をあきらかにされ、第二章、第三章は、それぞれ、特異な産業的連関のもとでの国立銀行業務の動態を、福島第百七国立銀行、横浜第七十四国立銀行の事例に即して分析されている。いわば、第一章に対する構造的分析となり、生産・流通の両過程と金融との結合の形態を、きわめて実証的にあきらかにしている。

第二編明治期日本銀行の発行制度（渡辺佐平氏）は、中央銀行としての日本銀行の成立の事情と、発行制度との関連を歴史的にたどり、とくに、金融政策の政策主体のこれをめぐる論議に注目され、比例準備制度から屈伸制限発行制度としての確立と、保証準備発行への移行過程をあきらかにし、産業資本の確立と、政府を通じての発行制度への圧力という点から、わが国中央銀行の歴史的特殊性さえうかびあがらせている。

以上二つの論文をとおして、明治前期における金融制度の中心としての日本銀行と国立銀行とが、きわめて資本主義化の特性に左右されつつ、発展していったことがあきらかになる。また、地方国立銀行にみる業態の著しい地域的な差異と、中央銀行の歪んだ発展のうちにすでに、今日の金融体制の特異性をみることができるであろう。（東洋経済新報社・一九六五年十二月刊・A5・二〇八頁・九五〇円）

—飯田裕康—

＊　＊　＊

大野英二著

『ドイツ資本主義論』

本書は、戦後わが国における西欧各国金融資本の成立過程の本格的研究のいわば先端をきって、さきに『ドイツ金融資本成立史論』（一九五六年刊）をものされた著者が、そこで明らかにした「ドイツ金融資本の成立過程の基本線」を「ドイツ資本主義の再生産構造のうちに位置づけて」、その「支配の歴史的規定性如何を問う課題」に対して「決着をあたえ」た力作である。したがってその「主題は帝制ドイツの社会構成の歴史的規定性を明らかにする点」におかれ、本書は、この主題をめぐって著者が前著公刊以後発表された諸論文を、「あたらしい研究成果を吸収」して「加筆と補筆」を加えながら、三部に分けて配列するという形で構成されている。その叙述は、著者自身の表現を借りれば、「時期的にはビスマルク・レジームを越えて、発生史の追跡を試みたり、あるいは発展傾向の展望をあたえたりして、かなり広汎にわたっている」が、あくまでも一貫して右の主題を追求することによって統一された、みごとな体系的研究成果である。

まず序論で、A　独占資本の発達と帝国主義、B　経済恐慌、C　階級闘争の深刻化と社会主義革命、の分析を行い、これを通じて、資本主義の「全般的危機」につながる「危機の社会的基盤」を明らかにし、第一部基幹産業分析では、オーベル・シュレージェン製鉄業の創出過程（第一章）と再編過程（第二章）、